

本学学生の大会サポーターとしての活動報告
ー平成19年度 「全国障害者スポーツ大会」に参加してー

佐藤 沙織¹⁾ 村上 照子²⁾

An activity report as the meeting athletic supporter of the student

ー Participation in the 2007 A national handicapped person athletic meeting ー

Saori SATO Teruko MURAKAMI

要旨

平成19年度秋田県において開催された全国障害者スポーツ大会（秋田わか杉大会）に、本学介護福祉学科、看護学科の学生が大会サポーターとして参加した。大会参加へ向けての取り組みの概要及び参加後実施した調査内容から、学生の活動の実態が明らかとなったので報告する。1. 学生達は、これまでの学内外の学びを活用し、担当した方々の障害種別に応じた対応ができていた。2. 選手とのふれあいを通して、多くの感動、学びを得、障害に応じた知識・技術の修得の必要性について認識していた。3. 赤十字マークの活用については、6割の学生が本学学生としての自覚ある行動に結びついたと回答した。

キーワード：障害者スポーツ大会 サポーター 障害別対応 赤十字マーク

Summary : A national handicapped person athletic meet was held in Akita in 2007. Both students from the department of nursing and the department of care and welfare participated in the meet to supporter the athletic. Actual conditions developed students acting in support of the athletes at the conclusion of participation in the meet, yielded the following investigation.1. The students made use of conventional learning skill were better able to cope with a handicapped person's specific classification. 2. Through direct contact with a handicapped athlete, the students gained better knowledge and lasting impressions. Students also recognized that it was necessary to acquire greater knowledge and skill according to a person's disabilities. 3. The inflection of Red Cross symbol mark as connected to their action, gave the junior college student better awareness.

key words : handicapped person athletic meeting, supporters, correspondence according to the handicapped person,

The red cross symbolmark

介護福祉学科 1) 助教 2) 教授

本研究は、平成19年度日本赤十字秋田短期大学共同研究助成による研究である。また、第16回介護福祉学会で発表したものを一部加筆・修正したものである。

I はじめに

日本赤十字秋田短期大学（以下本学）では赤十字の「人道」を建学の理念とし、それを日常生活の中で行動化することを目指し、両学科共に、ボランティア活動論、赤十字概論を始めとした、赤十字の理念を基調とする科目を設定している。また、施設等におけるボランティア活動を日常的に行い、学生達はこのような活動を通して、対人援助職者として実践的学びを得ていると考える。

今回、全国障害者スポーツ大会（秋田わか杉大会：以下大会）に大会サポーターとして参加することとなり、全国の多様な障害を持つ方々とふれあう機会を得た。サポーターとして活動する中で、選手個々の障害を理解し、適切な方法でコミュニケーションを図り、信頼関係を築いていく過程は、介護福祉あるいは看護の専門職として成長する上で、貴重な体験となり、日頃の学びを最大限に活用できる機会となった。

そこで今回、本学の学生であるという自覚をもって行動し、実際場面においてどのような活動を行ったかについて調査を行ったので報告する。

II 研究目的

全国障害者スポーツ大会サポーターとして、どのような活動を行ったかについて、その実態を明らかにする。

III 研究方法

1. 対象：本学介護福祉学科2年次生48名、看護学科2年次生17名 計65名
介護福祉学科は、全員参加を原則とし、看護学科は、自由意思による参加とした。
2. データ収集方法：質問紙調査法
3. 調査内容
 - 1) 担当した障害者の別と介助内容
 - (1) 担当した障害者の別と活動回数
 - (2) 介助方法（自由記述）
 - (3) 手話辞典の活用状況と今後の活用について
 - 2) 赤十字マークを使用しての感想
 - 3) スポーツ大会全体を通しての感想
4. 分析方法：項目毎に単純集計を行った。自由記述は、障害の種別に分けてそのままデータとした。
5. 倫理的配慮
調査にあたり、研究目的、調査方法、無記

名調査、個人の評価を目的とするものではないこと、プライバシーを厳守すること、調査結果は当該研究のみに使用すること、調査の集計・分析後は、報告集として公表すること、調査への協力は自由意思であること、途中で止められること、協力者の求めに応じ、調査結果に関する情報を公開すること、について書面にて説明し、同意が得られた学生にのみ実施した。なお、本調査の実施については本学研究倫理審査委員会の承認を得た。

IV 大会参加までの取り組みの概要

1) 大会参加のスケジュールとその概要（表1）

(1) 参加学生状況

介護福祉学科2年次生48名、看護学科2年次生17名の合計65名となった。

実習等を経験し、一定の知識・技術を有する2年次生を参加の対象とした。

(2) 本学の担当内容（図1）

学生は、大会に参加する選手などの競技に関する介助・誘導のサポートに当たり、各県の選手との交流を目的とした、大会サポーターとして活動した。

3名を一組とし、競技場内外での案内誘導を主な内容とする競技担当（活動日数3日間）として参加した。

(3) 大会サポーター養成講座（表2）

事前準備として、大会事務局より大会サポーター養成講座標準カリキュラムが提示された。

本学が大会サポーターとして支援する競技種目は陸上競技であった。陸上競技は、さまざまな障害を持つ方が参加するため、視覚障害、肢体不自由、知的障害、聴覚障害等についての理解と、手話、要約筆記の習得が義務づけられた。

介護福祉学科において、上記の講義は、形態別介護技術の講義を受講しており免除となった。看護学科については、一定の医学的知識は有しているものの、障害の形態に応じた介助の知識の習得が必要であると判断され、大会サポーター養成テキストをもとに1) 視覚障害のある人の理解と介助技術、2) 肢体不自由のある人の理解と介助技術、3) 知的障害のある人の理解と介助技術について、4) 聴覚障害のある人の理解と介助技術、5) 手

表1 大会参加のスケジュールとその概要

年 月	スケジュールと概要
平成18年度 3月	<ul style="list-style-type: none"> 大会事務局による大会サポーター養成講座 大会事務局担当者による講義と、北都銀行接遇マナー担当による講義を受講した。 本学教員による大会サポーター養成講座 養成講座テキストを元に講義と実技を実施した。
平成19年度	<p>6月</p> <ul style="list-style-type: none"> リハーサル大会に向けてのオリエンテーション (大会事務局による説明)留意事項・案内誘導、介助の動線等の確認 (本学教員によるオリエンテーション) 欠席等の連絡方法、貴重品管理、体調管理、服装、飲食など <p>リハーサル大会 開催日時:平成19年6月10日(日) 場所:秋田県立陸上競技場 リハーサル大会は、障害者スポーツ大会東北大会に相当し、学生は実際に障害のある選手の方々をサポートした。教員は、一日引率し、学生の動きを見守った。他の担当校として、看護学校、高等学校が参加した。</p>
	<p>9月</p> <p>本大会直前の説明会 (大会事務局による説明)行動計画・リハーサルでの反省等を含む留意事項 (本学教員による最終オリエンテーション)</p> <p><内容></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 出発時間について(早朝6:40) 2. やむを得ず欠席する場合の連絡方法 3. 持ち物について 4. 提出物について <ol style="list-style-type: none"> 1) ボランティア活動報告書 2) アンケート用紙 5. 配布物について <ol style="list-style-type: none"> 1) IDカード・競技札 2) ワッペンシール 3) 赤十字社Tシャツ 4) 手話ポケット辞書 6. 大会当日配布 <ol style="list-style-type: none"> 1) 大会ジャケット・帽子 <p>※ワッペンシールと赤十字社紋入りTシャツの配布について 活動中、本学学生であることが分かるように、また自覚と責任ある行動を取れること目的として日本赤十字学園のマークが印字されたシールと、赤十字社紋入りTシャツを配布した。</p>
	<p>10月</p> <p>本大会 開催日時:平成19年10月13日(土)～15日(月) 場所:秋田県立陸上競技場</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実習のために全県に分散していた介護福祉学科の学生は、12日(金)と、16日(火)を移動日として、実習を一端中断し、大会開催中は実習施設から自宅(アパート等)、宿泊場所に戻り、活動した。 ・3日間とも本学を集合・解散場所とし、バスによる一斉送迎で対応した。 ・早朝から夜遅くまでの活動となるため、遠方から通いの学生3名が宿泊対応となった。 ・担当教員は、朝の集合・解散、及び大会会場での巡回を実施した。 ・6月のリハーサル大会が行われた際の気候と異なり、本大会は非常に気温が低く、体調を崩した学生も1名程度見られたが、残りの学生は全日程を無事に終了した。

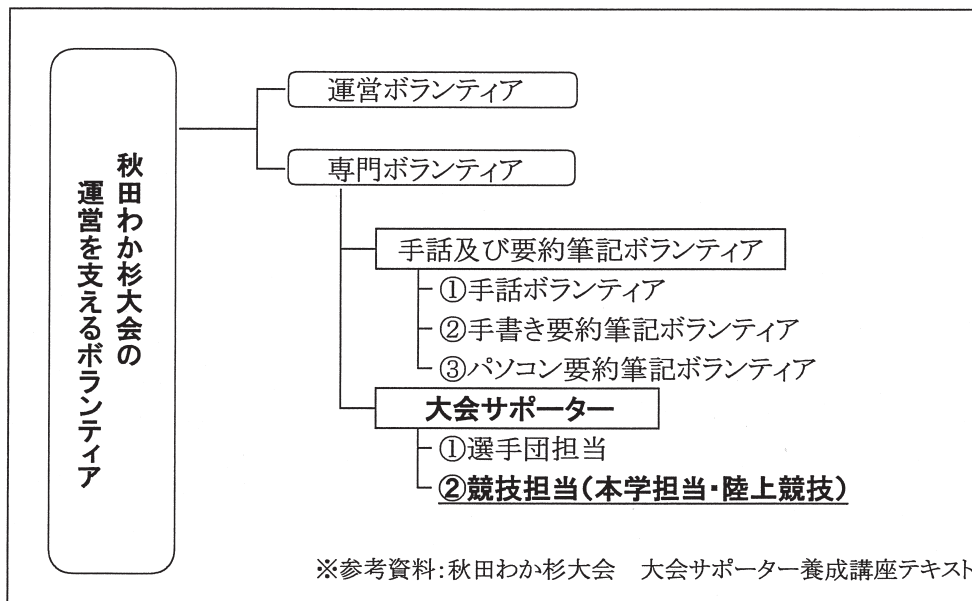


図1 大会ボランティア並びにサポーターの種類

表2 大会サポーター養成講座標準カリキュラムと本学受講内容

	講義内容		介護	看護	担当者
1	オリエンテーション	第7回全国障害者スポーツ大会概要	○	○	大会事務局
2	講義	障害者スポーツとわか杉大会の実施競技について	○	○	〃
3	講義	障害者福祉について		○	本学教員
4	講義	視覚障害のある人について		○	〃
5	実技	視覚障害のある人への介助技術について		○	〃
6	講義	肢体不自由のある人について		○	〃
7	実技	肢体不自由のある人への介助技術について		○	〃
8	講義	知的障害のある人について		○	〃
9	実技	知的障害のある人への介助技術について		○	〃
10	講義	聴覚障害のある人について		○	〃
11	実技	手話実技1		○	〃
12	実技	手話実技2		○	〃
13	実技	手話実技3		○	〃
14	実技	手話実技4		○	〃
15	実技	手話実技5		○	〃
16	実技	要約筆記実技1		○	〃
17	実技	要約筆記実技2		○	〃
18	講義	大会サポーターの役割	○	○	大会事務局
19	講義・実技	接遇マナー研修	○	○	〃
20	講義	大会期間中の行動計画	○	○	〃

話実技1～5, 6) 要約筆記実技1～2の受講が義務づけられた。

両学科共通の講義については、大会事務局

が担当し、看護学科の講義については筆者が担当した。

V 結果

回答数は、介護福祉学科34名、看護学科9名の43名（回収率66.1%）であった。全ての質問項目に回答があったものを有効回答とし、有効回答率は100%であった。

1. 担当した障害者の別と介助内容

1) 担当した障害者の別と活動回数（複数回答）
 学生は3日間の活動中、一人あたり4回～6回の誘導介助を実施した。

活動延べ回数は、多かった順に知的障害者のある方119回、肢体不自由の方36回、視覚に障害のある方14回、聴覚に障害のある方10回であった。

2) 介助方法について（表3、表4）

移動の際は、担当した全ての方に歩行介助を実践した。また障害の種別ごとに見てみると、肢体不自由の方には、車椅子介助、歩行介助、視覚に障害のある方に対しては、手引き歩行を実施した。

コミュニケーションについては、多くの選手と音声言語によるコミュニケーションが可能であった。聴覚に障害のある方においては、件数は少ないが、身振り、手話、筆談、空書を実践し、多様な方法を活用していた。

また、さまざまな障害のある方に合わせ、細やかな配慮をしながら介助していた。

表3 担当した障害者の別と介助内容（複数回答）

担当	移動			コミュニケーション							その他留意したこと	
	車椅子	歩行	ガイド	筆談	空書	文字盤	手話	読話	指字	旗り		音声
知的障害のある方		30名								13名	87名	9名
肢体不自由の方	13名	6名								2名	28名	8名
視覚に障害のある方		1名	6名								14名	6名
聴覚に障害のある方		3名		3名	1名		4名			9名		3名
合計	13名	40名	6名	3名	1名		4名			24名	129名	26名

表4 介助中に留意した点（自由記述）

障害種別	知的障害のある方	肢体不自由の方	視覚に障害のある方	聴覚に障害のある方
	説明のわかりやすさと動作への配慮	歩行、移動の際の段差、速度、坂道への配慮	視覚情報の具体的説明（周囲環境・危険回避）	専門ボランティアとの協力不安への配慮
記述内容	<ul style="list-style-type: none"> 選手と同じスピードで歩くことを心掛けた わかりやすい説明を心掛けた 付いてこれられない場合は、「あせらなくてもいいですよ。」と見守りを実施した。 明るい言葉かけを積極的に実施した きちんと付いてこれているか後方を確認した 選手がバラバラにならないよう気をつけた （はぐれて）迷わないように歩く速さに留意した 的確に誘導することを心掛けた 積極的に話しかけた 	<ul style="list-style-type: none"> 段差に気をつけた ゼッケンを貼る気配り 選手と同じスピードで歩いた 歩行速度に注意した 目線を合わせた 車椅子は坂道に注意した 選手がバラバラにならないように注意した 手の届かない所を手伝った 	<ul style="list-style-type: none"> その場の様子を詳しく伝えた 介助者がいない方にはずっと付きそった 段差や溝があるところは、教えるなど注意しながら誘導した 今何をするのか、どこへ行くのかなど説明することを心掛けた 「段差があるので気をつけてください」と周りの環境に配慮した言葉かけをした 言葉ではっきりと分かりやすいように伝えた 	<ul style="list-style-type: none"> 手話や文字盤は専門ボランティアに任せた 不安にならないようにするためコミュニケーションをとるようにした 手話ガイドブックが便利であった。選手からも好印象であった。

3) 手話辞典の活用状況と今後の活用について
(図2-1、図2-2)

手話辞典については、聴覚障害を持つ方を担当するか否かに関わらず、今回の活動を機会に、障害福祉の分野について関心を持ってもらうこと、継続したボランティア活動参加への動機付けを目的として、参加全学生に配布した。

実際に手話を用いてサポートした学生は4名いたが、大会中での手話辞典の活用状況は、配布した全学生中のうち「十分活用した」3名(7%)、「まあまあ活用した」3名(7%)、「あまり活用しなかった」12名(27.9%)、「全く活用しなかった」25名(58.1%)となり、ほとんどの学生が活用することができなかった。

今後の活用については、「機会があれば活用したい」24名(55.8%)、「時々見て復習したい」、12名(27.9%)、「持ち歩くなどして継続して活用したい」7名(16.3%)、「今後活用することはない」0名(0.0%)であった。

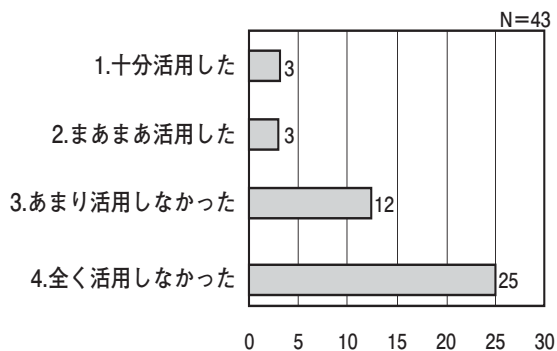


図2-1 手話辞典の活用状況 (人)

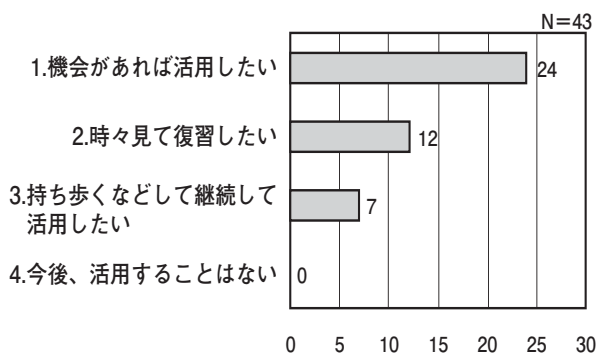


図2-2 手話辞典の今後の活用について (人)

2. 赤十字マークを使用しての活動

(図3、図4-1、図4-2)

大会開催中は、本学学生としての自覚を持って行動できることを目的とし、赤十字社社紋入りのTシャツ(1枚)と上腕部に貼用する赤十

字マーク(一人あたり大会日数分3枚:サイズ75mm×75mm)を配布した。

これら二つの使用について、「日赤短大の学生という自覚を持って行動した」24名(55.8%)、「特に意識しなかった」17名(39.5%)、「赤十字のマークを付けることに抵抗を感じた」0名(0.0%)であった。

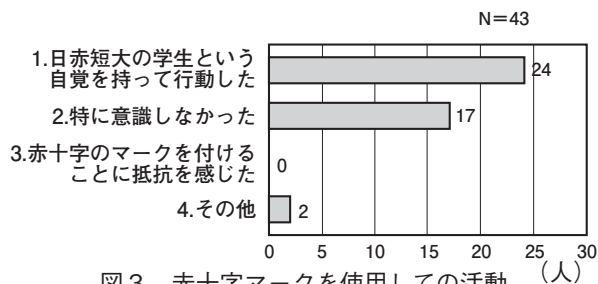


図3 赤十字マークを使用しての活動 (人)



図4-1 配布シール



図4-2 配布Tシャツ

3. 大会全体を通しての感想(複数回答)(図5)

大会全体を通しての感想として「選手の姿に感動した」37名(86.0%)、「障害を持つ方について復習したい」25名(58.1%)といった意見が見られた。さらに「障害者観が変化した」24名(55.8%)であった。

VI 考察

1. 担当した障害者の別と介助内容

1) 担当した障害者の別と活動回数

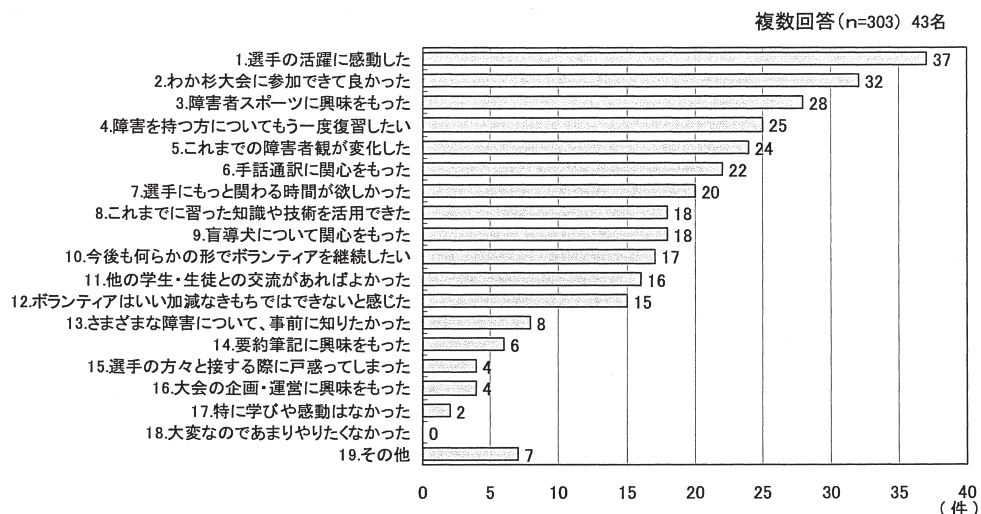


図5 全国障害者スポーツ大会全体を通しての感想

担当した障害者の別では、知的障害のある方が最も多かった。担当は全て大会事務局が決定したが、参加選手の障害種別の割合によるものと推察される。

2) 介助方法

介助の内容が移動の介助とコミュニケーションが主となったのは、本学学生の担当が陸上競技選手の競技場内外での案内誘導であったためと考えられる。

移動の介助では肢体不自由の方に対しては車椅子介助、視覚に障害のある方に対しては手引き歩行などを実践していた。これは、学内での当事者参加による車椅子介助体験、視覚に障害のある方のための手引き歩行の演習、盲老人ホームでの実習などによる学びが活かされていたものと考えられる。

コミュニケーションについても自由記述から、音声によるコミュニケーションだけではなく、状況の判断や言葉の意図が伝わりにくいと思われる知的障害の方に対しては、わかりやすい言葉や集中力を妨げない的確な誘導を心掛けていた。視覚障害のある方に対しては、大会進行上、番号プレートや文字による案内表示など、視覚情報によって運営されている状況下において、周囲環境の具体的な説明や視覚情報の伝達、移動の妨げとなる段差や坂道について情報を伝えていた。聴覚障害の方へは様々なコミュニケーション方法を活用しながらサポートしていた。大規模な大会の運営において、視覚情報だけでは十分な情

報を得られない方に対し、手話は十分に活用できなかったものの、身振りや筆談など、他の方法も活用し、積極的に関わろうとする意欲が見られた。本学では手話、点字を実施し、聴覚に障害のある方、視覚に障害のある方を招いての講義を実施しており、その学びを活かしたのではないかと考えられる。

これらのことから、学生は学内で学んだ講義、演習、実習で得た知識、技術を活用し、選手の個別性と状況に応じた誘導介助にあたっていたと考えられる。

3) 手話辞典の活用状況と今後の活用について

手話辞典の配布は余裕を持って行い、事前に学習できるよう配慮した。しかし、多くの学生が手話辞典を活用することができなかった。これは、他の障害と比較し、聴覚に障害を持つ方々と接する機会が少なかったためと推察される。

介護福祉学科においては、手話が必修科目として位置づけられているが、実習においては、身体障害者療護施設での実習が2カ所のみとなっており、日常的な手話活用の機会は少ない。また、看護学科においては、病院での臨地実習等において、障害を持つ方と接する機会は多くないことが推察された。この大会サポーター養成講座と、大会サポーターとして参加するにあたって、手話辞典を活用した自己学習を通して、手話というコミュニケーション方法を身につける機会となったと考えられる。

両学科の学生ともに大会参加中、手話辞典を十分活用する事ができなかったものの、復習や自己学習に使用したいという回答であった。

手話は単語を覚えるだけではなく、コミュニケーションを図ることが重要であり、今後本学においても実践の場を増やす必要性が示唆された。

2. 赤十字マークを使用しての感想

調査結果から、赤十字マークの使用によって、本学学生としての自覚と責任を促すのに概ね効果的であったと考えられる。しかし、特に意識しなかったという学生も多く、使用方法とその効果について検討していく必要があると考える。

3. 大会全体を通しての感想

調査から選手とのふれあいを通して多くの感動があったことがわかった。

また、「障害を持つ方々についてもう一度復習したい」、「これまでに習った知識、技術を活用できた」、と振り返る学生が多いことから、日頃の学びを發揮することができ、自信につながり、障害を持って生活する方々に再度目を向け、知識・技術を高めようとする姿勢がうかがえた。

さらにこの体験をきっかけとして、ボランティアに取り組みたいと考えている学生も見受けられ、学内での講義、演習、施設等における実習と同時に、このような体験を日常的に行っていくことが求められていると考える。今後も本学の教育体系の中にボランティア活動などを効果的に組み入れていきたいと考える。

話、筆談、身振りを活用していた。しかし、手話辞典を十分な活用することはできなかった。

2. 赤十字マークの活用について、本学学生としての自覚ある行動に結びついていたと回答したのは約6割であった。

3. 選手とのふれあいを通して、多くの感動、学びを得、障害に応じた知識・技術の修得の必要性について認識していた。

謝辞

秋田わか杉大会の開催に際し、大会サポーターとして活躍された学生の皆様、ご協力いただきました、実習施設の皆様ならびに本学教員の皆様、多大なるご指導をいただきました、大会事務局の皆様深く感謝申し上げます。

文献リスト

- ・青柳育子 (2005) : G福祉短期大学新入生のボランティア活動に関する調査報告, 群馬松嶺福祉短期大学紀要6, pp41-50.
- ・馬場由美子・島かおり・大宅顕一郎 (2006) : 学生のボランティア活動と社会的スキルの変化に関する一考察, 永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要, 36, pp155-162.
- ・高橋宏子・合津千香 (2006) : 介護福祉学科学生におけるボランティア活動推奨の取り組みの現状と課題, 松本短期大学紀要15, pp65-73.
- ・日本福祉教育・ボランティア学習学会 機関編集委員会 (2002) : 日本福祉教育・ボランティア学習学会年報 7, 2002, 万葉舎.

Ⅶ 結論

大会参加を通しての調査から、以下のことが明らかになった。

1. サポーターとして担当した方々の障害種別は、多い順に知的障害、肢体不自由、視覚障害、聴覚障害であり、介助の内容は、移動の介助及びコミュニケーションであった。

1) 移動の介助方法としては、肢体不自由の方へは車椅子介助、視覚障害者の方へは手引き歩行など、日頃の学びを活かし活動していた。

2) コミュニケーションでは、音声によるコミュニケーション以外に、聴覚障害の選手と手